夢追い人列伝
その二　「吉村旦伝」

初めに

一葉の写真がテーブルの上に置かれていた。インタビューに伺った自宅でのことである。１５名ほどの女性陣に囲まれた吉村旦氏が端然とした表情で写っている。今年（令和元年）１０月にあった、国府中時代のバスケット部の教え子による「米寿を祝う会」のスナップだと氏は目を細めた。

バスケット関係者は皆、氏を「旦（たん）先生」と呼び習わす。それは、選手、教員、指導者、協会役員など何足もの草鞋（わらじ）を履いて本県バスケット界に大きな足跡を残し、今も重鎮として貢献やまない氏に対する親愛と敬意を込めた呼称でもある。本名の「旦（あきら）」を使うのは、もしかすると本人くらいのものかも知れない。

本県バスケットボール競技における先覚者の功労を伝える「夢追い人列伝」シリーズ、渡辺一平氏に続く第二弾は吉村旦氏である。

吉村　旦（よしむら　あきら）
昭和６年１１月生まれ・山口県防府市在住
山口大学教育学部卒業
（一般社団法人）山口県バスケットボール協会顧問
（元理事長・副会長）
元山口県公立中学校教員（昭和３０年４月～平成４年３月）

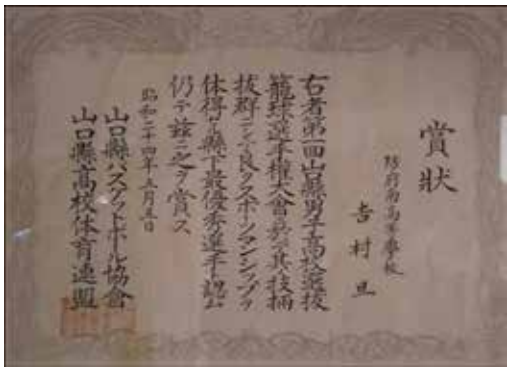
１　シューター

１枚の表彰状がある。戦後間もなくの新制防府南高校（現防府高校）で１年生からチームの中心選手として活躍した吉村氏の姓名がくっきりと記されている。

戦時下の昭和１９年、吉村氏は防府市の松崎小学校を卒業し、旧制高等小学校で１年間学んだ後、旧制防府中学校に入学する。やがてバスケット部に入部するが、それは兄がバスケットボールを手にしているのを見て面白そうだと思ったからだと言う。理由はもう一つある。戦後スポーツ解禁となり仲間の多くが野球になびく中、他人と同じことはしたくないと敢えて別の道を選んだ。へそ曲がりだったと氏は笑うが、部員はたった６名ながら主力としてチームをリードし、３年次には県下６校で争った中学生大会（当時の呼称は「幼年大会」）で優勝の栄冠を手にしている。

昭和２３年に防府南高校に入学、１年生ながらポイントゲッターとなる。当時は男子もボスハンドでの外角シュートだったが、少々のマークはかいくぐってリングを射貫いてい

た。その卓越したシュート力により、氏は上級生を差し置いて第１回山口県男子選抜籠球選手権大会の「最優秀選手」に輝く。記念すべきその賞状の写真が、県協会６０周年記念誌『夢を追う』の一頁に収まっている。今でも吉村氏はフリースローにやかましい。外そうものなら顔をしかめるその背後には、シューターとしての強い自負がある。


賞状

防府南高等學校

吉村 旦

右者第四回山口県男子高抜籠球選手権大会ノ最優秀選手ニシテ良クポジションヲ体得シ県下最優秀選手ニ値シ仍テ茲ニ之ヲ賞ス

昭和二十四年五月五日

山口県バスケットボール協会

山口県高校体育連盟

昭和２３年の第３回福岡国体には防府南高校が県代表となって出場し、吉村氏は１回戦勝利の立役者となった。因（ちな）みに、その時のコーチは試合中フリースローを全て放棄し、今で言うディレードオフェンスを仕掛けて話題をさらったそうである。その頃のルールでは、フリースローの代わりにスローインを選択することができた。

高校卒業後、吉村氏は新制なった山口大学教育学部英語学科に進学する。早速バスケット部に入部するものの、環境は未整備で指導者にも恵まれず、活躍の場は多くなかった。それでも熱心にバスケットに打ち込んだ経験が後で役立つことになる。

２　指導者の道へ

吉村氏の指導者としての原点は教育実習にある。大学４年時に実習生として防府市立佐波中学校に通い、風の舞うアウトコートで男女バスケット部の面倒をみた。その指導ぶりを見込まれてか、昭和３０年、大学卒業と同時に新任教員として当の佐波中学校に赴任する。それから英語の教科指導とバスケットの強化指導の二人三脚が始まった。

新進気鋭の指導者を得て佐波中男女チームはたちまち頭角を現す。練習の実があがり市内で優勝するのに時間はかからなかった。県大会でもベスト４入賞を果たし、正直なところそれで十分満足していたと氏は語る。全県優勝など頭になかった。

コーチの傍ら、自らも選手としてコートに立つ。ＳＧ（シューティングガード）として教員団チームの一員に加わったが、当時の国体にあった「教員の部」の種別でも３回戦の壁は厚かった。昭和３６年、２９歳で秋田国体に出場した時の回想がある。

［吉村］秋田では民泊でお寺に泊めてもらったが、これが良かった。…秋田まで行くのは大変だった。日本海回りの鈍行列車、みんな床に新聞を引いて寝る。

―『夢を追う』座談会から―

このお寺では特別にきりたんぽ鍋が供され、皆が舌鼓を打ったそうである。選手には半額程度の経費支給があったらしいが、秋田まで行くのに２、３日かかったと言う。そして、これが氏の選手として最後の大会になった。この頃には大学で腕を磨いたプレイヤーが教職を志すようになり、体力的にもそろそろ潮時と感じていた。もっとも教員団との縁が切れた訳ではなく、昭和３８年、請われて教員団の監督になる。この年はちょうど山口国体の年で、チームはガード陣の奮闘もあって１回戦徳島県戦を勝ち上がるも、続く神奈川県に屈し５位入賞に終わった。その時の事情が『夢を追う』に書かれている。

── 結果的に総合得点で山口県は164.1点、東京都が164.5点と僅差で総合優勝を逃すこととなった。バスケットボール競技は大会日程の最後に組まれていたため、バスケット

の成績如何で総合優勝が決まるとあって各チームは大声援を背に奮闘これ努めたが、強化の遅れも災いしてか成績的には残念ながら最高が5位（ベスト8）にとどまった。

天皇杯を逸した責めをバスケットだけが負ういわれはないが、教員の部でも少年の部でもどこかがもう一つ勝っていれば総合優勝に手が届いていた。わずかに及ばなかった悔しさは関係者に共通した思いであり、監督としての無念さは今も吉村氏の胸にある。

山口国体の年が氏の佐波中学校最後の年になった。新任以来９年の歳月が流れていた。異動先は防府市立桑山中学校、吉村氏の先輩にあたる体育教師がいた。曰く「市内制覇くらいで満足しているようでは話にならん。県で優勝せんと本物ではない」。その一言が氏に火をつける。それから一層チーム作りに励み、県１位を目標に掲げた。赴任した年に男子チームを夏の選手権大会で３位に入賞させた原動力はそこにある。ただ、この時準決勝戦のベンチに吉村氏の姿はない。実は、その日は教員団の試合が重なっていた。吉村氏も頭を抱えたろうが、選手もさぞ泡を食ったに違いない。

２年目は女子の顧問になり、好選手揃いで県制覇に手が届きそうだった。選手権大会で順当に勝ち進み、決勝戦は強敵の宇部市立神原中学校。試合前にユニフォームがらみで一悶着（ひともんちゃく）あり心中穏やかならぬままトスアップになる。一進一退が続き残り３０秒で２点リード。よし、ボールを回せとストーリングを指示するがどうもおかしい。一向に時間が減らないのである。当時の時間表示は手動によるめくり方式だった。しびれを切らしてオフィシャル席に詰め寄った瞬間、笛が鳴った。何とベンチテクニカルファールの宣告である。喉（のど）まで出かかった抗議を飲み込んで見詰めたフリースローは２本とも外れ、そのまま試合終了。氏にとって初の全県優勝だった。

その後は上位に食い込むものの優勝には縁がないまま、昭和４４年、５年過ごした桑山中から徳山市立岐陽中学校に転勤になった。この頃高校ではとっくに全国総体が開催されていたが、中学校は中国大会さえ無かった。昭和４６年、ようやく中国大会が始まることになった。当時の中国大会は、各県代表１校と開催県２校の６チームによるトーナメント戦で争われ、優勝チームのみ全国大会に出場できた。吉村氏は岐陽中男子チームを率いて松江に乗り込んだが、ベスト４に入れず唇を噛んだ。

その前年の昭和４５年には、地元・防府市で第８回全日本教員選手権大会が開かれた。この時の県チームの宿舎は「吉村屋」になっている。吉村監督の自宅に寝泊まりして大会に臨んだのである。チームの士気は高まり県教員団チームは１回戦を突破、２回戦は善戦及ばなかったものの今では懐かしい思い出になっている。昭和４７年度末、吉村氏は岐陽中学校を後にする。この年は教員団の監督を退いた年でもあった。

３　全国大会

ちょうど四十歳代に差しかかり脂ののった年代になる昭和４８年からの１２年間は、吉村氏にとって多端な歳月となった。この年、徳山市から再び防府市に戻り国府中学校に転勤した氏を、女子バスケット部の監督とともに生徒指導部長の要職が待っていた。校内暴力など全国的に生徒の荒れが表面化し始めた時期であり、学校規模が大きくなればなるほど手を焼く実情に、毎日全く余裕がなかったと氏は述懐する。それでも持ち前の負けじ魂を盾に１２年間生徒と向き合い続けたその陰には、防府警察署の補導員として青少年の問題行動に身を挺していた夫人のひたむきな支えがあったことも見逃せない。

しかも、国府中の１２年間は山口県バスケット協会の理事長（現専務理事）職とすっぽ

り重なっている。余人をもって替えがたいと言われやむを得ず引き受けたものの、協会は経営的に赤字続きの上、一定額の負債を抱えてその再建が大きな課題となっていた。

類を以て集まると言うべきか、氏に役職が押し寄せる。昭和５０年には中体連バスケット専門委員長まで兼務することになり、溜め息混じりの回想となる。「バスケットの関係で外線電話がかかると呼び出されて事務室まで走る。それがしょっちゅうで、学校の電話回線は当然塞がる。いい顔はされず、とにかく事務室には肩身が狭かった」。

一方、チームの指導にも熱が入る。毎日の練習は防府スポーツセンター（現ソルトアリーナ）まで出かけていたが、走って行くには遠い。保護者の送迎あればこそだった。同僚の手厚い支援もあり高校関係者の指導も仰ぐ中、着任２年目の昭和４９年、国府中女子チームは全国選抜大会出場の金字塔を打ち立てる。山口県勢初の快挙だった。ディフェンスを鍛え、中国大会では粘り強い戦いぶりで決勝戦に進む。対戦相手は地元の松江四中。会場を包むアゲンストの風をはね返し堂々中国地区制覇の快挙を成し遂げた。それは、そびえ立つ山陰勢の牙城（がじょう）に風穴を開けた瞬間でもあった。吉村氏はこう述べている。

> 昭和46年に、中国大会が幾多の困難を乗り越えてスタートし、この大会の覇者が全国大会出場という道が開けました。しかし、山陰勢の壁が意外に厚く、本県にはそのチャンスが訪れませんでした。忘れもしない第4回大会で、国府中学校女子が見事に頂点に立ち、私の身体は彼女らの手によって宙に浮きました。感動しました。この勝利は私自身の喜びにとどまらず、各指導者に明かりを灯し、自信と勇気を与えました。
>
> －山口県中学校体育連盟創立50周年記念誌への寄稿から－

東京で開催された全国大会の１回戦は、北九州市の引野中学校との対戦だった。九州地区トップレベルのチーム相手に彼我の実力差はいかんともしがたく、出だしからリードを奪われ必死に追いすがるも届かなかった。出場したことで満足していた訳ではないが、監督自身が少し固くなっていたかも知れないと吉村氏は苦笑する。しかし、この時刻まれた記念すべき第一歩が、やがて藤井房雄監督率いる下関市の彦島中学校男子チームの全国優勝に結びつくことを忘れることはできない。

後日譚がある。この試合をきっかけに国府中学校と引野中学校の交流が始まる。北九州へ出かける度に多くのことを学んだと吉村氏は語る。引野中が防府を訪れることもあり、その時の練習ゲームには防府商業高校も顔を出したそうである。なお、この功績を讃えて昭和５０年に氏は中学校体育連盟から優秀監督賞を受賞している。

４　不眠不休

国府中躍進の背後で、吉村理事長の両肩に県協会の負債清算の難題がのしかかっていた。まずは倹約を旨とし郵送代を節約するため近隣の学校への郵送物は自ら自転車で運ぶなど随分と汗をかいたが、焼け石に水だった。ついに抜本的な手立てを余儀なくされる。

氏には腹案が主に二つあった。一つは、高校の県協会主催大会への参加料徴収である。たちまち何人かの校長から反対の声が上がる。だが背に腹は替えられない。「それなら、出場されなくて構いません」。そう突っぱねるとどこも黙るしかなかった。もう一つは、実業団チームによる日本リーグ大会の開催招致である。しかし、黒字になるか赤字になるか見通しは立たない。えい、と打って出た結果、わずかながら黒字を計上でき、それ以降は収益も少しずつ膨らんで協会の貴重な財源となった。

かくして財政の健全化が図られ、氏は就任１０年目を区切りに理事長交代を申し出た。ところが、後任者に急な人事異動が生じてしまう。やむなくもう２年留任し、昭和５９年に実業団連盟の中村幸男氏にバトンを手渡したが、氏はこの１２年間を「まさに不眠不休の毎日だった」と振り返っている。校務に加え理事長と専門委員長を兼ねれば、多忙を極めるのは想像に難くない。ただ、兼務すればこそ実現できた案件もある。それが昭和５６年の公式球への皮ボール導入である。全国や中国大会では既に切り替わっていたが、県内ではゴムボールのままだった。コストの都合はあるにしてもこれでは他県と対等に戦えない。折衝につぐ折衝の末に採否は機関議決に委ねられることとなり、最終的に１票差で承認となった。思えば次代への見事なアシストパスであった。

岩国市で３月に開催されている「中国中学生交歓バスケット大会」は、吉村氏の肝煎（きもいり）で創設された錬成大会であり、全国に先駆けての県協会ホームページ開設を理事長として積極的にバックアップしたのも氏である。他にも、『夢を追う』にある県車椅子バスケット連盟の県協会加入に際しての貢献など、理事長時代の功績はことほど多い。

なお、理事長退任と同時に移った防府市立大道中学校でも女子バスケットの顧問を務め、藤井房雄氏に奇襲戦法を教わるなどしたが、戦績的には見るものは残せていない。３年で宇部の常盤中学校教頭として転出し、その２年後に防府市立小野中学校の校長として地元に帰ってきたが、バスケットの指導は顧問に任せて口を挟むことはしなかった。

平成４年３月に定年退職し協会副会長に専心していたところ、牟礼中学校の校長から女子チームのコーチを頼まれた。男子部の顧問は女子にまで手が回らないと言う。好選手がいて層も厚く、平成１１年には選手権大会２位で中国大会出場を果たした。氏の働きかけが実り、その頃は全国大会に中国地区から２校出場となっていたが、牟礼中学校は予選リーグ１勝１敗で決勝トーナメントに進めなかった。結局、自身が関与した制度改革の恩恵に与（あずか）ることができなかった訳で、思えばいささか皮肉な巡り合わせであった。

５　思い出すことなど

７０年以上バスケットボールに携わっていると、吉村氏に思い出は多い。

教員になって５年目、昭和３４年に氏は日本公認審判員の資格を取得し、その年の熊本国体に招集される。以後、国内大会で笛を吹くことになった。

> ［吉村］国体に行くと、ひな壇にずらっとお偉方が並んでいる。吹き終わったら呼ばれて「後半18分のファールはどうだったのか」などと聞かれる。ゲーム中の出来事や判定はみな覚えておかなければいけないというんだね。大変だった。
>
> ー『夢を追う』座談会からー

今でこそ組織的に審判員養成が図られ、多くの審判員が的確なジャッジでゲームを円滑に進めているが、当時、県内の日本公認審判員は氏でやっと３人目であった。大会で各チームの指導者が相互審判を務める中、時としてベンチからは不満の声も聞かれた。氏は競技規則の適正な運用に向け後進の指導と育成、審判組織の地盤作りに力を注いだ。

理事長・委員長兼務の折、宿泊料規定からは例外的措置ながら萩の中国大会で参加中学校全校を「萩本陣」一館に宿泊させ、各校から喜ばれたことも思い出深い。

三田尻女子高校（現誠英高校）との縁も深い。バスケット部が頭角を現し始めた頃、遠隔地から入学を希望する中学生が出始めたが、バスケット部の寮はない。そこに手を差し

伸べたのが吉村氏だった。小松徹監督の指導に共感し自宅を下宿にと申し出たのである。最初の年に二人、翌年一人で、もちろん心を砕くことは多かったが、三田尻女子高の同窓会長を務めていた奥様の献身的な支えがここでも物を言った。平成の同校の大躍進には、吉村氏の一家を挙げての支援も大きな役割を果たしている。

平成２３年の山口国体で、バスケット競技は全種別とも天皇杯・皇后杯の得点に絡めなかった。その責任を取るとして吉村氏は県協会副会長を辞している。けれんなく是々非々を貫く毅然とした生き方は、氏の面目躍如たるものがある。

その貢献に対して各方面からの表彰等は多い。

防府市及び県バスケットボール協会功労賞に続き、昭和５８年には山口県体育協会から山口県体育功労賞を受ける。さらに、平成に入って中体連功労賞、山口県社会体育功労賞、山口県車椅子バスケットボール功労賞と続き、平成２０年、永年にわたる学校教育への貢献に対して瑞宝双光章受章の栄に浴することとなった。時に７７歳、皇居に赴き夫妻揃って栄えある受章式への出席であった。バスケットに明け暮れた来し方を振り返り、改めて内助に努められた奥方への感謝の念しきりであったに違いない。

終わりに

吉村氏は、今日の高校バスケット界の外国人留学生偏重の現状に首を傾げる。長短あるにしても、留学生の能力に大きく頼るチーム作りは高校バスケットの面白さを失わせると嘆く。また、後進の指導者には「バスケットを生き甲斐にせよ」と檄（げき）を飛ばす。詰まるところ、何かを犠牲にしなければ納得ゆく成果など得られない。それが信条である。氏もまた「趣味はバスケット」と言って憚（はばか）らない一人である。

── あるシーンが蘇（よみがえ）る。三田尻女子高が初めて中国大会の舞台に立った１回戦、対戦相手は島根県の１位チームで優劣は明らかな戦況にもかかわらず選手は泥臭く食らいつき、最後の最後に奇跡的な超ロングシュートで大逆転勝利を演出する。その劇的な幕切れに応援席から両手を突き上げて飛び出した関係者がいた。吉村氏だった。今なお試合会場で一つ一つのプレーを褒めたり注文をつけたりする姿は、本県バスケット界を背負って来た気迫に満ちている。氏の「旦（たん）」は、胆力の「胆」でもあるに違いない。

それにしても、吉村氏の歩んだ道のりはもとより平坦ではなかった。未開地を拓いてきた氏を表す言葉としては、「勝負師」や「気骨」がふさわしい。吉村氏を初めとする先駆者の、時に背水の陣を敷きながら、まさに骨身がきしむような辛苦と功労あってこそ今日の本県バスケット界の隆盛があることをしみじみ噛みしめるのである。

［文責：顕彰事業委員会］